岩手県学童保育連絡協議会ニュース

わんこがっぱニュース

岩手県学童保育連絡協議会
2024年9月25日 №3

豊かな学童保育をめざして

指導員学校・合宿研修会

あいさつする来賓の八重樫浩文北上市長

岩手県学童保育連絡協議会は８月３０日、９月１日に第５２回指導員学校・第３４回合宿研修会を北上市のブランニュー北上で開催しました。岩手県内の学童保育の保護者、指導員ら２８３人が参加。２日間にわたり学び、交流しました。

初日の開会行事で、県連協の阿部勝会長は運営指針には、放課後児童クラブは児童の権利に関する条約の理念に基づき、子どもの最善の利益を考慮して育成支援を行う。放課後児童支援員は、常に自己研鑽に励みながら必要な知識及び技能をもって育成支援にあたるとされている。この研修会は、こうした責務に十分応えうる内容と確信している。この研修会をよりよい学童保育のための力にしてこう」とあいさつ。

続いて、来賓の八重樫浩文北上市長が「北上市としても、連絡協議会の皆さまと連携しながら、児童福祉の充実を目指していきたい」とあいさつしました。続いて基調報告が行われ、宮井徳子県連協事務局長が「保護者と指導員が力を合わせ、子どもたちが安心安全に、そして豊かに生活できる学童保育を実現していこう」と呼びかけました。その後、参加者は、５つのテーマに分かれて分科会に参加しました。

２日目は、分科会発表の後に全体講演を行い、北上市の笑いのたねプロジェクト代表の後藤誠子さんが「不登校ひきこもりの子どもの親が幸せな理由」と題して講演行いました。

分科会報告

第１分科会

学童保育の生活づくり

学童保育では、子ども、保護者、指導員がともに行う「子ども一人ひとりと、こどもたちの生活を豊かにする継続的な営み」を生活づくりと呼んで大切にしています。第１分科会は県連協役員の橋本有希先生を講師に、前半は生活づくりの基本や大切にしたいことを学びました。後半は「子どもとのかかわり」「保護者とのかかわり」をテーマにグループトークを行い、実践を交流しました。この分科会を通して参加者の皆さんが信念をもって、子ども、保護者とかかわり、それぞれの学童保育での生活をつくっていることが分かりました。グループトークでの交流により閉ざされた学童保育ではなく、開かれた学童保育の生活づくりにつながったと感じました。

（陸前高田市・指導員　比内 紗耶火）

第２分科会

指導員の仕事　日々の記録から分かること

全国学童保育連絡協会事務局長の高橋誠先生を講師にむかえ、保育記録について学びました。保育記録とは。記録は誰のために書くのか、「子どものため」、「自分のため」。「同僚のため」この３つの視点からお話いただきました。具体的な記録を通して、指導員の関わりが、子どもにとってどうだったのか？という振り返りをすることは、子どもへの理解を深めるために必要なことだと学びました。記録を書き続け、活用する、を繰り返していく。継続していくことに意義があることを教えていただきました。記録の方法は人それぞれ違いますが、まずは、継続していけるような取り組みを考えていきたいと思いました。

（滝沢市・指導員　水本 真美）

第3分科会

子どもと遊び　～ほいく誌をつかって～

はじめに、ほいく誌２０２２年７月号の「子どもにとっての遊びとは」を読み合わせ「子どもは遊びの中で自分たちのやりたいことを実現させるため、最大限の力を発揮し、自分自身を成長させている」ということを基本に、指導員、保護者がどう関わるかを考えました。その後、参加者全員であそびを実践し、童心にかえって初めて会う皆さんと笑い合いました。世話人の門田弘之先生は「遊びの中でトラブルがあってもいい、それをどうやって解決し、折り合いをつけるか。大人へと成長していく中で大切な経験だ」と話されました。参加した保護者、指導員の皆さんの「頭や体をつかった遊びが大事だと思った」。「コミュニケーションや心をつかった遊びの大切さが分かった」という感想が印象的でした。

（大船渡市・指導員　鎌田 美奈子）

第4分科会

子どものやる気を引き出す言葉かけのスキル　PEP　TALK

第４分科会は日本ペップトーク普及協会の吉田浩規先生を講師に、子どもへの言葉かけを学びました。ペップトークとはアメリカでスポーツの試合の前に選手を励ます短いスピーチのことで、大谷翔平選手がＷＢＣの決勝前に話した「あこがれるのはやめましょう…」はまさに、このペップトークとのこと。実践のポイントなどを説明していただき、参加者もペップトークを考えたりしました。先生自身が野球でプッペトーク（ペップトークの反対）をしていた時は、子ども同士もミスを責め合うようになり、ペップトークに変えてからは「ドンマイ」と子どもたちの言葉かけも変わっていったそうです。先生は「子どもの存在や適性を否定してはいけない。叱っていいのは態度や姿勢だけ。能力を褒めることは成長につながらず、がんばったことを褒めることに効果がある」と話されました。先生ご自身のエピソードや穏やかで明るい声で、和やかな分科会になりました。

（盛岡市・指導員　藤原 のどか）

第5分科会

保護者会の活性化と運営課題の解決

自己紹介のあと、参加者がそれぞれの学童保育が抱える課題を共有しました。役員の担い手問題、時代とともに移り変わる指導員、保護者の考え方の変化、学童保育の運営実態の共有の難しさ、指導員不足、市連協加盟学童間の関わり、効率的な実務のあり方などの課題がだされました。世話人の阿部勝県連会長から保護者会運営の課題を克服するため、６学区８支援の単位でＮＰＯ法人化した陸前高田市の事例紹介がありました。保護者会運営は指導員、保護者の信頼関係を土台にした運営が可能で、保護者や指導員の声を直接的に運営に反映できるというメリットがある一方で、事務負担や保護者役員の入れ替わりによる安定継続への不安、偏った運営方針などの課題があるとのことでした。法人化により専任事務職員の配置による保護者の事務負担軽減、行政窓口の一本化、各クラブの運営規定の統一、指導員の就業規則の統一、改善などがなされたとのことで、大いに参考になる事例であると感じました。後半は、保護者会役員の担い手問題にテーマを絞り、参加者で意見交換を行いました。

（久慈市・保護者　岩城 凌）

全体講演　不登校ひきこもりの親が幸せな理由　笑いのたねプロジェクト 後藤 誠子さん

後藤さんは自身の次男が不登校やひきこもりになっていった時の状況を語り、その時の自分について「世間体が悪いと思っていた。スーパーで近所の人に聞かれるのが嫌で人目を避けるように買い物に行っていた」と振り返りました。親の会や家族相談会について、「はじめ、自分はそんなに落ちぶれていないと考えていた」と過去の自分のネガティブな感情を言葉にし、「でも、人と出会い、つながったことで自分を変える言葉に出合うことができた」と自身の心境が変化していった過程を語りました。様々な出会いのなかで、「どんなに考えても子どものことは分からない。そんな自分をあきらめたら気持ちが楽になった」と述懐し、その心境を「やさしく、あきらめる」という言葉で表現しました。

後藤さんが、わらいのたねプロジェクトの活動をはじめ、ラジオやＳＮＳを通じて情報発信し、自分が楽しいと思うことをやり始めると、次男も自分の感情を表にだすようになり少しずつ変化していったといい、周りの人が元気でいることで、そのエネルギーがやさしく伝わる「さざなみ効果」という言葉を紹介し、「親の心の余裕が大事」と話しました。

北上わらいのたね事業所では「あなたはあなたのままでいい」という手書きのポスターが貼られており、「地域のみんながこういう気持ちを持てば、生きづらい人も生きていける社会になる」と話し、「私は次男のおかげで自分の好きなことを見つけて、それができている。皆さんは、自分が何をしている時が一番楽しいですか？」と参加者に問いかけ、「まずは、自分を幸せにしてほしい」と笑顔でメッセージを送りました。